

# 曹洞俳壇

選・村松五灰子

## 海鳴りのほどよき距離に炉辺話

東京都 矢野 祥子

評 イメージとして日本海の夜、炬明りの辺に心寄せ合う数人の集いがある。話のまにまに海鳴りがあり、絵本の絵が浮かんでくるような温かさがある。

## マスクしていつもの自分遠ざける

栃木県 山本 澄子

評 マスクをすると仮面を着けたような感じで自分で無くなるような、少し気持ち隠れごちになる。実はそれが本音の自分のような。リラックスできるのだろう。

◆ 風に笑みあれば終咲かんとす

栃木県 小林 翠香

◆ 寒北斗見上げて入る坐禪堂

三重県 荻屋奈良美

◆ 気忙しや婆の小走り十二月

長野県 下島 博

◆ 根野菜揃ふわが家の冬用意

北海道 川上 初子

◆ かけそばに利かす七味や夕時雨

茨城県 鈴木 米征

◆ 冬の霧晴れて釣舟増えてをり

千葉県 鈴木 英子

◆ 言の葉に命吹き込む桃青忌

静岡県 村松 保子

◆ 鎮魂の鐘打つ息を白くして

岩手県 阿部 瀬子

◆ 元日や軒に掲げん日の丸を

ロサンゼルス 井上 健一

◆ 湯気の香の椀を両手に茸汁

静岡県 望月かほる

### \*選者吟

## 蕨狩一の子分の犬連れて

五灰子

### \*作句小見

人はだれも白梅のような小さな小さな悟り、「眼から鱗」のようなことを積み重ねて生きて行きます。

俳句もそんなとても小さな開眼を、積み重ねて僅かな一句を得るのでしょう。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

一夜さに落葉宣言栗大樹こぞ昨年ぞの日記に十日も早し  
京都府 荻野千枝子

評 木が落葉宣言するという擬人法が効いている。栗の大樹なれば一層相応しい。日記にその日を記すほど親しみのある栗の木なのだ。「十日も早し」の結句は冬支度を急がせる合図のようにも、晩年への心の準備を急がせるようでもある。

産卵を終えたる鮭の岸に寄る骸むしろを雫むしる数羽

の鴉 岩手県 関合 新一

評 生きとし生けるものの宿命を眼の当りにした光景が凝視されている。作者の感慨を何ら披瀝せず、現実を突き付けたところに凄みがある。

◆刈田より旅の小鳥は舞ひ立ちぬ秋の光に重さ消す群  
岐阜県 後藤 進  
◆年の瀬は深閑として過ぎてゆき過疎の通りに陽はかたむきぬ  
京都府 小林 靖子

◆豪雪に最後の空き家つぶされて開拓村は山野に返る

福島県 西木 甚

◆掌てに余るほどの大きな柿ひとつ卓上に光る今宵十六夜

長野県 両角 徳子

◆参道に無数の落ち葉が呼吸して坂東詣での我を励ます

秋田県 小松 紀子

◆どこからか集まる猫の数多くみなこつち見て通り過ぎゆく

東京都 野村 信廣

◆庭掃きつつ葱きざみつつわきいづる五七五の海泳ぎて元く

宮城県 小田島麻利

◆亡き母の絹の肩掛け巻き眠る十三回忌過ぎし夜寒を気

奈良県 横井 正子

◆冬の空飛機ひこう機のランプか星光ほしひかりか見紛う我を思はず笑ふ

大阪府 西羅 梢

◆『禪の友』に載りし吾が短歌たんか読むたびにいよよ学ばん意欲わきくる

秋田県 石川 京

## \*選者詠

風邪熱にゆるされて、いるうたね転寝の耳に流るる  
鎮火せぬ火事 ちづ

## \*作歌小見

西木さんの開拓村の一首、先人たちが筆舌に尽くせぬ開墾の  
労苦の末に得た土地が、また山野に戻ってしまふ無念を詠う。  
見聞きした世代であればこそその感慨だろう。詠うことで、生活  
の張りを得ている小田島さんの一首も心強い。



# 大本山永平寺



## 上山

朝、目が覚めますと洗面し、まず仏前に線香をお供え致します。仏法の守護神である「龍天護法善神」と、道元禪師さまを助けたといわれる「白山妙理権現」と書かれました軸などが入った袈裟こすり行李こよりに向かいお拝をし、一日が始まります。

窓を開けますと、線香の煙が雲の如くに外へ流れ出てゆき、同時に冷たい風が足元をなで、背筋をスツと伸ばしてくれます。

修行僧の事を「雲水」と申しますが、まさに雲や水の如くに、修行道場を去るものもあれば、新たに入門を請うものもまいります。

永平寺をお開きになりました道元禪師さまは、正師を求め、日本のみならず中国まで足を運ばれました。

雪の舞う中、入門を請い、山門に立つ雲水たちを見ますと、道元禪師さまもこのように道場を巡ったのだらうかと、その姿を重ねてみるものであります。

道元禪師さまは、「日々の生活修行」が、そのまま「仏の生活」だとお示しです。

永平寺の山門を一步くぐったその時から、姿はそのままですが、正に仏そのものの生活が始まるのです。

本年も、草鞋わらじを濡らし、網代笠あじろがさの紐をギュツと引き締め、多くの雲水たちが仏の安らぎを求め、道元禪師さまのお足元に集まっています。

ご本山だより



## 大本山總持寺



### 七回忌を迎えた東日本大震災

厳しい寒さもようやく和らぎ、暖かさを感じる頃となりました。東日本大震災から七回忌を迎えることとなり、今年も三月十一日に總持寺大祖堂に於いて東日本大震災の復興祈願「祈りの夕べ」を横浜市仏教連合会との共催で開催いたします。

当日は、午後一時三十分から江川禅師さま御親修のもと七回忌慰霊法要を行い、引き続き横浜市立潮田うしおだ中学校マーチングバンド部、歌手やなせななさん、福島県立安積黎明あさかれい高等学校合唱団による演奏会を開き、犠牲者の冥福と被災地の一日も早い復興を祈念します。

また、この度「祈りの鐘」を三宝殿の丘「救世観音ぐぜいかんのん」そばに建立し、この鐘の竣工法要と鳴らし初めを、夕刻より江川禅師さま御親修で行います。それとともに曹洞宗三重県青年会和太鼓集団「鼓く司す」による太鼓の演奏が奉納され、夜八時まで万灯会まんとうえも行われます。

ぜひ皆さまも「祈りの夕べ」にご参加いただき、お参りくださいますようお願い申し上げます。

また、十七日（金）から二十三日（木）は春季彼岸会です。毎日多くの檀信徒の方々が参詣されご先祖さまの御霊みたまに手を合わせます。特にお中日の二十日（祝）には、江川禅師さまが大導師を務められての大施食会法要が行われます。